

ひろば大代

NO.189

大代公民館

この一年をふり返って

新年度への抱負と課題

館長 渡 吉正

この一年間、公民館事業は余りにも盛沢山であり、町の諸問題は山積して日毎の原稿は夜を徹して休む暇もない程、ハードなスケジュールに追われ通してした。

本年度は六年度の反省の上に立って余裕を持って事業をこなして行きたいと思うのですが、そうも問屋が降りしとくれそうにもなく、新年度もまた満載の荷物を積んで突っ走って行かねばならない様です。

今年には戦後五十年という大きな節目の年に遭遇し、加えて都市交流会の十回記念に当る事業を成功に導く試験の年となります。そして更に『戦争体験記』をまとめて上梓する責任重大な年でもあります。

浅学非才な私が病弱な身に鞭打って

この一年頑張りますので、どうぞ新年度もよろしく御協力をお願い申し上げます。

《目標課題》

一、老人の生きがい対策（ふれあいコミュニティセンターの建設計画策定）

二、若者の定住施策

三、町おこし対策（都市交流会のイベントづくりと地場産業の振興）

四、郷土愛の醸成をはかる（文化財の保存保護と郷土芸能の育成）

具体的な事業計画は次号へ掲載します。



「びかびかの一年生」

上市 畠山千鶴

木々の枝先にかわいらしい葉っぱが見られる様になりました。一生懸命伸びようと、お日様の光をあびようと、びかびかに輝いています。

我家の長男、誠也もびかびかのランドセルに大きな制服を着て大代小学校に入学しました。まだようやく歩き初めた頃に大代町に住み始め早や六年、

高山の自然と友だち、地域の皆さんの中で、のびのびと成長させていただきました。

これからの六年は、今まで以上に楽しいことがあるでしょう。それと同時に、つらいことや苦しいこと、悲しいことも待ちうけていることでしょうが、何があっても動じない高山のように大らかに育ってほしいと思います。

そして、今、びかびかで大きすぎるランドセルに、入りきれないほどの楽しい思い出をつめこんでほしいと願っています。

〓 四月の異動〓 (敬称略)

大代町では中学校が閉校になり、又春の異動で次の通り転出・転入或は役員の変更がありました。

◆自治会 (一自治会のみ)

川上 渡井広志

◎ 転出

◆大代中学校から

校長 斎藤雅信 大田市第三中へ

教頭 嘉儀宏一 飯石郡三刀屋中へ

教諭 永見浩二 大田市第三中へ

田中敏博 大田市池田中へ

教諭 中西 平 簸川郡大社中へ

〃 小野寺聡子 大田市第三中へ

講師 勝部良子 大田市第二中へ

〃 中尾恵理佳 大田市川合小へ

養護教員 田康子 邑智郡谷住郷小へ

技能員 森 信子 大田市大代小へ

◆大代小学校から

教頭 岡 博之 仁摩小学校へ

教諭 北川 靖 県立松江養護学校へ

養護助阿部妙子 温泉津町福波小へ

技能員 熊谷博子 大田市高山小へ

◎転入

◆大代小学校へ

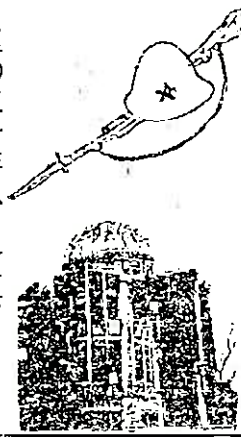
教頭 三嶋 亮 吉田村吉田小から

教諭 生越昭隆 温泉津町温泉津中へ

養護教員 神田滝子 多伎町田儀小から

技能員 森 信子 大田市大代中から

戦時体験記



「ふる里の二十年八月十五日」

東京都 米原光義

思いもしなかった敗戦早や今年は五十年目を迎えようとして居ります。

敗戦の一年前病氣療養のため一時帰郷し、翌年春、病氣も治りいざ軍隊に行くので有ればと志願をし徴兵検査を受け、第一乙種合格召集を今かと待って居る間に七月夏休み前に、当時の今田村長の依頼で自給自足に依る塩作りの責任者として福光へ行く事に成りました。

八代村の責任者宮本さんと一緒に講習を受け、大家村は福光の小学校を宿舍にして八代村は造り酒屋の空屋を宿舍にして小学校五年生以上高等科、先生、青年学校、婦人会等各々三日交代で夏の炎天下の作業は仲々大変でした。

作業の工程は長く成るので省略しますが、一日三十人位の動員で出来上がった塩はたったの五升位。八代村の宿舍は風呂が有ったのですが、大家村の宿舍は学校ですから風呂は無く、夜は暑くて蚊にさされ仲々寝就かれない日々でした。

なかでも本渡のオカミさん（公民館長の祖母）は年高で皆さんと一緒に作業をされて居る姿を思い出し大変であ

ったろうと当時を時折懐かしく偲んで居ります。

八月八日ソ連の参戦八月六日の広島原爆投下、私共はラジオを聞く迄も無く風の便りで、それ程大きな出来事で有った事とも知らされず居りましたが、八月十五日当日も平常通り作業に出で、お昼過ぎ玉音放送を聞かされた事を知り突然の事でも有り、唯ぼうぜんと氣力が抜けどうしたものかと役場へ連絡を入れても仲々通ぜず、そのうちに当方から連絡する迄待機しろとの報告。四時頃に成って引き上げろと言う指示が入ってカマス二袋の塩、釜等の道具を大八車に積んで力なく大家に着いたのが夕方薄暗くなりかけ頃、大家の役場の人達もおそらく放心状態でご苦労さんの言葉で迎える事すら出来なかつたのでしよう。

汗を流して作った塩もその後どうなつたかも知らされる事も無く、昭和二十年八月十五日の長い一日は終わつたが、初めて味わつた敗戦、唯ぼうぜんとこれからどうすれば良いのか目標を失つた敗戦とはこんななみじめで一瞬にして人生を変える。

夏が来る度に当時の事を思い出し戦争は二度としてはならない。ましてや侵略など……。唯々平和を念願するのみである。

戦後五十年に成り、今当時を回顧して、また改めて戦後半世紀の年に当って、最確認して更に思いを深めて行くと思う。

「入隊から復員まで」

椿 吉本 登

太平洋戦争に突入していた昭和十七年三月十日、村民の方々に盛大な見送りをうけて村境まで、そして浅利駅まで歩いて汽車に乗り浜田へと向かったのである。

第五師団浜田歩兵第二十一聯隊補充隊に当時聯隊一番のきびしい九中隊に入隊した。通用門より管内に入り官服に着替えた。一日二日は良かったが、三日目頃より声が大きくなる。官給品の、員数が合わないと必ずやられる。太鼓のかわりになぐられる。一人ではなく同年兵全部が横一列に足を開いて並んでいる。古年次兵が文句を言い終

つたら、平手打ちの往復びんた、「眼鏡の者は取れ、歯を喰いしばれ」である。倒れると又一つ増しに叩かれる。「貴様、現役兵だろうが」と言う声がとぶ。斯くして、大先輩の木口小平の銅像を見上げながら俵給五円拾銭の軍隊生活の始まりだ。

初年兵の間はきびしい教育の末に一期検閲が終わり、次の教育は通信隊要員として通信の教育を受ける事になった。一に通信、二にラッパ、三に担架の大油と言った。柔な兵種と言う意味だ。基本となるモールス信号の特訓が毎日続いた。たたかれ乍ら寝言にまで言った。やっと一分間に七十字から七十五字まで送受信出来る位になった。

二期検閲終了後中隊の事務室に臨時に勤務する事になった。其の内に又命令が出て学業の為に豈集延期になっていた(昭和十八年九月、学生豈兵猶予停止)専門学校大学生の通信としての初年兵教育係助手を命じられる事になった。流石に頭も良く記憶もはやい一般社会なら私より年長者だが、軍隊は違う、私が一日の長がある。今鍛えておかなければいけない。将来甲種や乙

種幹部候補生だから見ている間に私より上に上がる。私同様にモールスや教練に励んだ。通信方法は色々あって無線機と、手旗に回光機、又番号布板等すべてモールスが基本で、これが習得していないと全然駄目である。

夜になると螢のように浜田の市街地に出た。管内より出た事がなかったのが初年兵共々大変嬉しかったものだ。光線による信号は夜が受信しやすいので、だから夜出たわけである。

秋季演習が安来市であり、演習が終わり私が長以下五名で民宿し、翌朝集合時間に約三分おくらせて大変に叱られた。忘れられない大失敗であった。

演習後帰隊し同年兵や古参兵が臨時外泊で帰った。野戦上番だと思った。大多数の兵力が出征して行った。召集兵がはいり野戦下番があり又隊内は一杯になった。同年兵はいなくなり淋しくなったが、入隊して約一年になり内地勤務かと思つて居たら、初年兵係助手を免ぜられ、二泊三日の臨時外泊があった。順番が来たなと思つた。親も承知している私も独身で妻子もない気軽なものだった。今思えば当時召集で

出た人は、家庭があり妻子があり心配だった事と想像する。

二月二十三日屯營を上から下まで新しい官給品を身につけて出発した。山口へ広島へ宇品港へと七千吨の大正十年建造の老朽船に乗船して船団を組んで船出をした。釜山港に寄港した。満ソ国境かと思っていたが軍の方針が変わって台湾、基隆、高雄、馬公要港に寄港しだんだん南下して行く仏印サンジャクに寄港した。外国で初めて山の上に日ノ丸を見て嬉しく思った。シンガポールに着いた。上陸して検疫を受けた。乙巡に乗りジャワ島に行きジャカルタからスラバヤまで汽車で横断して、又独航船で前線へと追及して行く砂浜を何日も行軍した。聯隊本部へ、通信中隊へ到着した。しばらくしたら西も東も分らないうちに又命令が出た。今度は人事係助手を命ぜりと。事務引き継ぎ後二日位で先任者は分遣隊で出て行った。なれない事ばかりで無我夢中で軍務に服した。浜田で習ったモールスと在隊中お別れになり、軍事極秘人事極秘の印鑑の中で生活する事になった。其の内大きな事が突発した。

事務室より離れて居る兵舎方角より大きな銃声があった。急いで行って見ると一人の初年兵が泣き叫んで居る。見ると足の甲より打って貫通銃創している。五、六人の戦友が来る。止血の為に木を切ってきて大腿部のところをしばり、木でねじめるが血は止まらない。「痛いから取ってくれ」と言っていて泣き叫ぶのを叱り乍ら、担架に数人で乗せて対岸にある野戦病院に急ぐ。この河は鰐もいるし干満の差は激しくて二米、三米位にもなる。

結果は次の通り、新兵は古年次兵の銃の手入れをするのが当然の如くで銃に弾が装填してあったと言う。古兵は弾は入れて無いと言う。当時自活の為に狩猟班が編成してあり、三八式歩兵銃だと丁度良い具合に足は打てる。調書を取るのに大分手間がかかった。原稿をもらって昼夜をかけて六部作製差し出した。当人は大阪此花夜間商業出で友人と出世争いしたと言う。調子が悪いので思い切った行動に出たらしい。其の後の彼の消息は知らない。功績係助手の方が病気で入室のため兼務する事になり忙しい毎日になっ

た。やがて、終戦のニュースがはいってきた。我々聯隊通信の近くに軍通や師通があり、終戦の情報は早い。やがて敵の飛行機が降伏文書を撒きに来た。部隊は集結すると事になり、アル諸島ドカバラを後退してケイ諸島ウゴール着、ケイスラ島トアールに大部隊が集結した。武装解除され丸腰になった。

復員船を待つ間に又一仕事、復員業務に夜昼精出した。個人に渡す為に色々な戦時名簿や事実証明書、戦友名簿等々である。終つてからは復員船が来るのを待つばかりこの地で異国の丘の歌を習った。現地に数人の戦犯容疑者が残った。復員船が来て乗り込んだ種子島を横に見乍ら和歌山県田辺港に入港した。病人が出て横浜へと廻航されそうになったが紀伊田辺へ上陸した。白い粉をかけられ、所持品検査を受けた。此処で三々五々別れてしまった。奈良線で京都駅に着き、二番線で島根へ西下した。土産は風土病のマラリア(三日熱)と特効薬のキニーネ一瓶であった。帰郷して一年発病した。昭和二十一年五月三日、約足掛け五年の軍隊生活に終止符をうった。

大代の昔話
「ねこ又の話」



昔むかしあつたげな。はでばという家があつてなあ。そこのおばあさんが嫁じょうや息子やらが何でもかでも売つて、どがあもならんと思うとつたげな。

ある日、火のはしごの上にながりや何でも見ようけえ、嫁じょうや息子のことも見えるだろうけえと思つて、一番空い(上へ)上がったげな。そこいねこ又ちゆうて、ねこの化け物が来たげな。婆さんは知らんかったが、おおかたその家の若い者が頼んだらうでなあ!

ねこ又は、やぐらの上がつとる婆さんをおろいて殺して食うたげな。それから家にもどつて大きな頭の坊主に化けて、そいではでばの婆さんに化けてはちまきをして寝とつたげな。

朝まになつて嫁じょうが、「かかさん、起きて朝飯食はんさい」と起こしに行つた。すると、「にやあにやあ、食べられん。」と言つたげな。ねこだけえ口がまわら

んで、それを聞いた嫁じょうが、「まあ、こんな婆さんは口がもとらんようになったけえ。こんなどがあぞしんさつたで。」

と言つた。息子が夜着をはぐつて、「どこをどがあしなはつてな。」

と言つたら、しつかり夜着をくわえてはぐらせんで、「にやあにやあ。」

言つてばつかりだで、隣近所に寄つてもろうて話をした。近所の衆は、「こりやあなんだ。ねこ又だで。」

と言つたり、「こんなあ、ねこ又だでえ。これの(この家の)ねこは、しり尾が三つに分かれとりやあせんかな。」

とも言つたげな。それから、どおなこおなあ、みんなで寄つてたかつて夜着をはいでみたらしり尾が三つに分かれておつたげな。

「ははあ、このねこが婆さんを食うたもんだ。どこかえ骨を捨てとるけえ探してみるがええ。」

ということになつて、みんなで床の下を見たら、婆さんの骨やら髪の毛やらえつとあつたげな。ぱちちり。

★——★おしらせ——★

◎大代町八寄付二件

一、標柱(白御影石製)二本

但し大正天皇、奥田文部大臣

御手植松表示

東京石見高山会様から

二、天幕 二張

東京都秋川市 米原光義様から

一般の方にも使用して頂きたいとの事ですので公民館まで申し込んで下さい。

4月行事

◆3日(月) J A改良組合

◆7日(金) 婦人会役員会

◆11日(月) 幼入園式・小学校入学式

◆16日(日) 福祉弁当

◆18日(火) 4月編集委員会

◆22日(土) 連合自治会

